

① 島袋妙子さんへ

あなたが体験した戦争から、今年 2020 で 75 年が経ちました。

いま沖縄は、ややもすると、再び戦争の「捨て石」にさせられるかもしれない状況に置かれています。

力をつけつつある中国と、アメリカとの対立もありますが、辺野古をはじめとする地域・島々で進んでいる基地建設が、何よりも「捨て石」にされるのではないかという不安を掻き立てます。辺野古への基地建設だけではなく、ここ 4 年の間に奄美、宮古、与那国に自衛隊基地が置かれ、石垣では現在その建設計画が進んでいるのです。

あなたをはじめとする辺野古の住民が頑張ってきた座り込みは、残念ながら、いまだに続いています。私は、昨年 2019 年 2 月 24 日に行われた、辺野古基地建設のための埋め立ての賛否を問う県民投票の実施に奔走しました。軍事的にも必要性が疑われるのみならず、建設予定地に、マヨネーズ並みと言われる軟弱地盤が見つかり、技術的にも困難だとされる基地建設について沖縄の人々が改めて考え、対話し、その結果、どうかか工事を止められないかと考えたからです。7 割を超える人々が反対の意思を示したにもかかわらず、日本政府は一顧だにしませんでした。

これ以上私は、私たちは何をすれば良いのでしょうか。正直に言えば、日本に住む人々のみならず、この国の枠組みに限界を感じざるを得ません。

実は、あなたが目にしたかもしれない護郷隊に、私の祖父・親泊康勝は従軍していました。幸いにも祖父は、やんばるの山々での激しいゲリラ戦を生き延び、彼の長女である母から、私が生まれました。そんな私がいま、あなたと“同じ”思いで辺野古新基地建設に反対していることに不思議な運命を感じています。

昨年、辺野古新基地建設について祖父と話すと、「戦争につながる基地はいらない」と語っていました。しかし、なぜ戦争が起きてしまったのかを問うと、沈黙の後、「そういう教育だったから…」と答えづらそうに話していました。

当時とは、教育をはじめある程度自由にもものが言える社会になるなど、様々なことが変わっていますが、なぜまた戦争につながるような基地建設は続いているのでしょうか。私たちはあなたが体験した「戦争」から何を学んだのかと改めて思います。

私がなぜ戦争が起きたのかを疑問に持つように、いまを生きる私たちは、「なぜ辺野古に基地ができてしまったのか？」あるいは「なぜ止められたのか？」を、私の子や孫から問われるでしょう。そのとき、私は、私の言葉で語ることができるか。祖父の姿を見て、考えさせられました。

戦争体験者が「戦争につながる基地はいらない」ということの意味を考え、行動していくことが、その命題への応えなのではないかと思っています。

元山仁士郎（1991 年生まれ、28 歳、大学院生）